

## ハーバリストの現在 —ウガンダ・ブソガにおける「代替・補完医療」化の政治

中林伸浩

Herbalists in the 21<sup>st</sup> Century  
The Politics of Alternative and Complementary Medicine in Busoga, Uganda

Nobuhiro NAKABAYASHI

### 第1節 伝統医とハーバリスト

アフリカの伝統医療が西洋医療と並行して、今でも多くの人々に利用されているのは、よく知られた事実である。伝統医は町のなかだけではなく、病院のない農村部まで広く存在し、一般のひとびとに頼りにされているのである。WHOのある報告によれば、ウガンダでは人口 25,000 人につき西洋医 1 人であるのに対し、人口 700 人につき伝統医 1 人であるという。ウガンダのブソガ地方では伝統医のことをオムイワ (omuigha) といい、もっぱら草木からつくったクスリを用いて治療をおこなう。そこで、ここでは彼らを「ハーバリスト」とよぶことにしたい。実際、彼らはもはや昔ながらの「伝統医」ではない。多くはなんらかの現代的組織にはいつていたり、政府の指導やトレーニングを受けている。その際かれらを指す言葉は英語のハーバリスト Herbalist が多く使用されている（または traditional healer も用いられる）。現代ブソガにおける近代化の狭間で、いうなれば彼らはかつてのオムイワという伝統医から、ハーバリストとよばれる、まだ明確な定義のない新しい存在へと移行しつつある。

そうした現代的状況をうかがわせる機会があった。2005 年 9 月、イガンガ・ディストリクトのナムンガルウェという郡事務所所在地（サブカウンティ・ヘッドクォーター）の広場で、ある非公式の集会が開かれた。ここに集まったのは付近に住むハーバリストたち約 200 人で、会員証についての説明がおこなわれた。説明に乗用車で首都カンパラからやってきたのは、National Council of Traditional Healers and Herbalists という組織の代表だという三人組の男たちだった。そのうちのひとり African Traditional Medicine とプリントされた T シャツを着ているし、スーツ姿の男は WHO という文字の印刷されたカードを身につけている。彼らの目的はノート大の台紙に印刷されたこの組織のメンバーシップ証書を 6 万シリング（約 33US ドル）で売ることだった。そのために彼らは人々を前にしてかなり攻撃的な

スピーチを行った。これからは会員証をもたないハーバリストは商売ができないとか、「無許可」のハーバリストが女性患者をレイプして捕まったとか、あるいは客に依頼されて邪術を行った者は排除される、などと人々を不安にさせるようなことを言ったのである。

実はこうしたハーバリストにたいして会員証を発行し登録をよびかける企ては、ブソガにおけるハーバリストの社会的位置の変容と深くむすびついている。いまやハーバリストは公的医療機関、WHO、そしてウガンダ政府によって公的医療の補足的な役割を認められて、国民医療体系の一部に組み込む計画が進行中である。その結果ウガンダ各地のハーバリスト組織の活動が活発化し、この日ナムンガルウェに現れたような組織のように、会員獲得に奔走するグループがうまれているのである。実際、彼らはこの地域のハーバリストをこの日に呼び出すのに、地方政府（ディストリクト）の役所を通じて参加をよびかける手紙を送っていた。彼らの組織は名称が堂々としてだけでなく、その活動の目的も、会員の意識の向上や技術の増進、役所との連携などといった立派なものであるが、またご都合主義の傾向も顕著である。つまり未組織のハーバリストが大勢いる農村部にやってきて、宣伝をし、会員証を売ることによって安直に集金するが、その後は放置同然というパターンが多い<sup>1)</sup>。

この日の集会の成り行きは大変興味深いものだった。結論をいえばカンパラからきたこれら3人組のオーガナイザーは一枚も会員証を売ることができなかった。それは参加者側にその目論見を阻止しようとする準備がされていたからである。ナムンガルウェ付近のハーバリストは部分的にジェイムズ・マガンダという名のリーダーによって活動が組織されてきた。マガンダ氏はカンパラのハーバリストが来ることを知ると、自分の知り合いのハーバリストたちを呼び集めただけではなく、彼と地域活動で連携しているキグル首長国のサザ首長であるパトリック・イジンバに連絡して対応を依頼していたのである。後に述べるように、ハーバリストのマガンダ氏と伝統首長のイジンバ氏はこの地域の「文化」的活動のリーダー格である。マガンダはかれ自身ハーバリストであるだけではなく、アバスエジとよばれる、ブソガの伝統的宗教集団のリーダーでもある。この日もかれの配下のアバスエジが10人ほど集合し、かれら独自の音楽を演奏して氣勢をあげていた。マガンダはまたこの集会の司会役をつとめたが、イジンバはかれに自分の演説を最後にもってくるように指示した。カンパラの三人組が宣伝を終わったところで、かれらに反論する手筈にしたのである。それは成功し、集まったハーバリストたちはイジンバに拍手喝采をおくった。

イジンバはこの会員証購入を強制的な課金ととらえ、それができるのは地方政府かその代理者だけだと主張した。そのような場合でも、自分たちへの相談なしでは困るのだと。さらにイジンバはアバスエジの存在を正面におしだして、この課金がアバスエジの宗教にかかるものなら、どうしてキリスト教やイスラムにかからないのか、とも言った。こうしたイジンバの主張とそれに拍手して支持している、この地域のハーバリストたちを見て、

分がないと知ったカンパラからの三人組は、実際には議論はかみ合っていないが（会員証はイジンバの言うような強制的課金ではなく、宗教にも関係ない）、あっさりこの場の取引をあきらめたようだった。ただ帰り際にイジンバに「金が目の前にあるのだから、それを集めるのを一緒にやろう」とささやいたそうである。かれらのオポチュニズムをよく表した話である。

それにしてもこの集會はこの地域のハーバリストの現状の諸側面を私に垣間見せてくれる機会になった。200人ものハーバリストが集まったのは驚きだった。それはマガンダ氏が単独で集められる人数の2, 3倍であったろう。これは草の根のハーバリストたちの関心の高さと、ハーバリスト一般の活動が活性化していることを示しているように思えた。他方、カンパラからの三人組のような上部からのハーバリストの組織化は草の根とは異なった論理と洗練された言葉をもっていた。このハーバリストたちの対立は、単に利益の分け前や権益をめぐる争いというだけではない。マガンダ氏たちの対応から想像できるのは、現代的状況に対応して「伝統医」から出発した「ハーバリスト」たちはなにか新しい動きをしはじめているのではないかということである。

「代替医療」(alternative medicine) という語は、日本ではそれほど普及していないかもしれない。日本では昔から西欧医療に対して、漢方、和方のクスリの使用や、はり、灸、指圧、整体術などの医療・健康法がきわめて盛んで、その存在をあえて代替的な医療として定義づけるまでもないからであろう。しかし西洋においては近年、科学的、分析的な医学にたいして、全人的で、身体・精神の総合的医療、「ナチュラル」な医療が注目されるようになり、ホメオパシーのような民間治療、ヨガのような外来健康法、ハーブなどのサプリメントの使用などを総称して代替医療と位置づけるようになった<sup>2)</sup>。西欧においてこうした代替医療が商業的隆盛を招いているのをみると、代替医療への関心の高まりというものが近代医学の対立物を求めるのではなく、それとの補完的 (complementary) なものを求めているのを知るのである。

西欧におけるこの動向はアフリカの伝統医療への公的機関の関心の高まりとも重なっている。たとえば WHO はこのところ特にアフリカの伝統医療の発展に力をいれている。2001-2010 年を「アフリカ伝統医療の10年」とし、8月31日を「アフリカ伝統医療日」と定めたのもその表れである。ところで WHO の伝統医療 (Traditional Medicine) の作業定義というものがある。

伝統的医療とは、動植物・鉱物質のクスリ、精神的療法、手技、体操法を単独で、あるいは組み合わせで、健康を維持し、病気を診断・治療・予防する、保健についてのさまざまな業務・技法・知識・信条を含む<sup>3)</sup>。

この伝統医療の定義はよく読むと大変に包括的であり、興味深い含意がある。そこには単に薬草などを用いる単純なハーバリストの医療だけでなく、アフリカではそうしたものと分かちがたく結びついている、呪術的行為や、精霊の儀礼や、病いを診断する占いなどに関するさまざまな「業務・技法・知識・信条」が含まれていると考えられる。それはちょうど西欧において、「代替医療」のなかにヨガだとか気功だとかアロマセラピーなどが含まれることに対応している。つまり WHO の「アフリカ伝統医療」とは西欧でいうところの「代替医療」に相当している。(WHO は西欧におけるハリ治療のようなものは、その国の伝統でもないし、また主流の医療制度にも統合されていないという意味で、「代替・補完医療」を用いている)。

ちがいをいえば、西欧における代替医療は、コマーシャルリズムや、非西欧的医療への関心や、エコロジー運動などに拡散した市民意識の基盤のうえに存在しているが、アフリカのハーバリストの新動向は病院における医療制度の不足を補足しようという、もっと切実な社会的要請にもとづくもので、それはまた政府などの外部の諸機関からの働きかけに呼応したものでもある。ウガンダの場合それは HIV・エイズ対策の一環として特に促進された。ウガンダにおける正規の医療制度は増大するエイズ関連の患者への対応で過大な負担がかかっている。その上、病院の HIV・エイズ用薬品は高価で、とくに農村部の低所得者層にとっては利用できない。他方、ハーバリストは町だけではなく村のなかまでも広く存在する。ウガンダの政府による HIV・エイズ用薬品の提供能力の不十分さと、大多数を占める貧困層が病院で治療をうける機会が少ないことが、伝統的なハーバリストの治療に一般のひとびとの目が向いただけではなく、政府の関心も惹いたのである。1990 年にははじめられた「多領域エイズ・コントロール作戦」(the Multi-Sectoral AIDS Control Approach)では、国のレベルから草の根レベルまで、公的、私的組織から諸個人まで、この目的達成のために全力を動員することになった。政府のなかの委員会や、大学の調査研究組織や、児童の学校教育や、国際 NGO や、病人を支える教会ベースの組織などが連絡を取り合って活動をはじめた。伝統医療や伝統医と現代的な健康管理をむすびつける NGO も 1992 年につくられた。THETA (Traditional and Modern Health Practitioners Together against AIDS) というのがそれである。

ウガンダの伝統医には、各種の自主的なハーバリスト組織にみずから登録している者とそうでない者がいるが、いずれもその活動は認められている。1992 年にはハーバリストの諸組織を監督するナショナルな評議会がつくられた。NACOTHA (National Council of Traditional Herbalist/Healers Associations) である。現在これは内輪もめの結果空中分解したが、それ以前はウガンダ各地に登録された 87 ものハーバリスト組織を結集していた。しかしこれらのハーバリスト諸組織はその後それぞれのメンバーシップ、代表者、会費、規則などを明確にして独自の自発的結社として活動している (ナムンガルウェにやってきた

三人組はそうした分派組織のひとつである)。

このように現在のハーバリストはエイズ禍の蔓延とそれへの対応を契機にして、活気づいている模様である。しかし現代医療制とは大きく隔たった体制にあった伝統医・ハーバリストの医療制度への取り込みは見かけほど単純な事柄ではない。ブソガにおける西洋医と伝統医の関係は、日本における西洋医と漢方医の関係よりも込み入った社会的、文化的葛藤がある。それを「伝統医の代替・補完医療化」の政治としてここではとらえ、現代ブソガの社会的動態のひとつの理解としたい。

## 第2節 各種のハーバリスト

前節では伝統医のハーバリストへの変身が現代ブソガで大きなうねりとなっていることを概観した。しかしその変身も一様ではない。それぞれのハーバリストが、公的機関からのよびかけや、治療の新知識や、患者からの要望にそれぞれに応じることで、異なったタイプのハーバリストが生まれている。私のブソガにおけるインタビューから、そうしたハーバリストをA, B, Cの三つのタイプにわけて事例を説明してみたい。

Aは「クリニック」タイプと私が便宜的に呼ぶハーバリストである。かれらは野生の薬草、薬木からクスリをつくる点では何も特別なことはないが、治療のスタイルが何らかの形で医院風なのである。クスリを公的機関に送って、一定の薬効があることを証明してもらうというのはそのひとつである。もうひとつ重要なことは、このタイプのハーバリストは伝統的精霊に言及したり、関与しないことである。

Bはアバスエジ・タイプのハーバリストである。前述のように、アバスエジとはブソガの伝統的な宗教集団で、精霊の儀礼を専門的にこなう人々である。かれらは伝統医つまりオムイワとは、一応別のカテゴリーであるが、クスリの知識があればハーバリストを兼ねることになる。実際のところ、現代のアバスエジは大半がハーバリストになっている。

Cは「ウィッチドクター」タイプである。これは新しいタイプの霊能者で、かれらはクスリと呪物をつかって強力な精霊を動員し、治療すると信じられている。「ウィッチドクター」とは邪術もおこなう医者といったニュアンスのある俗称ないし蔑称であるが、ソガ人がよく使う名称でもある。

私がここで「クスリ」と書いているものは、病院の薬から区別したハーバリストの薬（ハーブあるいは生薬）のことである。それらの原料である薬草、薬木は、林や藪や湿地からみずから採取したものや、自宅で栽培したものである。その根、茎、葉、実、枝、樹脂、樹皮などをもちいる。また公営マーケットでもそうしたものは大量に売られている。そうした原料は通常単独では使わず、数種から20種ぐらいを混ぜて、クスリとして調合される。形状は砕いて粉薬にしたもの、ワセリンに混ぜて塗り薬にしたもの、煮出してシロップ状

飲み薬にしたもの、石鹼にまぜたもの、などである。これらはソガ語でオブレジ (obulezi) というが、名称上は病院の西欧薬と区別はない。以下の記述をみればわかるように、クスリには病気を治すものだけではなく、われわれが通常「呪術」とみなすような用途をもつものも含まれる。

#### 事例A 「クリニック」タイプ

A1・・・バサルルワ氏(60代の男性)は、イガンガ・タウンとカリロの間のかかなり辺鄙な市場に店を構えているハーバリストである。外側からみてもそこが「クリニック」であることを示す看板などは何もない。6畳ほどの広さの部屋に、机と長椅子を置き、まわりの棚には自家製のくすりを入れた容器が20本ほど並んでいる。それ以外、医院をおもわせるものはないが、少なくとも聴診器はもっていることから明らかなのは、かれが言うようにここが医院であって、精霊をよぶ社祠でないことだ。10軒ほどしか店のない市場ではあるが、舗装道路に面していて交通の便はよいので、時には100キロほどの遠方からも患者がくる。かれは分厚いノートに患者の名前、年齢、住地、部族、診断、処置、などを一行で簡潔に記録しているので、一日平均で2、3人の患者が訪れるなど、かれの活動が一目でわかる。

かれが治すといった病気は、結核、喘息、寄生虫駆除、頭痛、マラリア、食べ物アレルギー、眼病などであるが、とくにマラリアと鎌状細胞貧血(アフリカ人特有の赤血球異常による貧血)の専門家だと主張している。というのは、1991年にOAU(アフリカ統一機構)の科学技術研究委員会がおこなった薬草調査に協力して、かれの知っている薬草のサンプルを提供した。その成分の分析結果によってその効用が証明され、実際、1993年にそこが発行した薬草一覧のハンドブックにはかれの名前がクレジットされた薬草二種(*Plectroanthus forskoholi*, *Vernonia cistifolia*)が、使用法とともに印刷されている。さらにかれは1997年、その薬草からつくったクスリをカンパラのUganda Herbalists Associatio というところに送ってチェックしてもらっている。そしてその組織からハーバリスト(Herbal Researcher)の証明書をもらった。

興味深いのはかれの調合したクスリにあたかも薬局の薬を思わせる独自の命名をしていることだ。「バサグリディン」、「バサマイシリン」、「バサラブ」、「バサクイン」がそれである。いずれも語頭の「バサ」は自分の名前の「バサルルワ」の最初の二文字からとったもの。最初のもの効能は鎌状細胞用であるが、梅毒も治すという。二番目のものは消化管の調整、回虫の駆除だという。これらのクスリの成分と効用についての私の知識も調査も不十分ではあるが、どのような症状の診断にも、この4種のクスリを複数あたえていることが、かれのノートの「処置」のところを見ていて気がついた。どうやらこれらのクスリ

は万能薬的であるらしい。

実際、ハーバリストはどのような症状の患者でも必ず処置する。バサリルワのところに来る病人は、公的病院からまわってやってくる患者が多い。医師が鎌状細胞貧血の患者を送ってくることもあるし、HIV の診断をうけた者がワラをもつかむ思いでかれのところを訪れることもある。いずれの場合も患者は医師の書いた簡単な診断書をたづさえてくる。バサリルワはそれを見て対処する。かれのノートに一か所「邪術」witchcraft（ソガ語では eirogo または obulogo という）という診断が書かれていたので尋ねてみると、病院で原因不明というので、そうしたとのことだ。つまり、鎌状細胞貧血であれ、HIV であれ、邪術であれ、かれは自ら命名した 4 種のクスリで自信をもって対処している。患者の治療の経過は逆に公的病院にたいして報告するペーパーを患者にもたせることもある。

かれは 1943 年生まれ。かれは自身をオムイワとよぶより、リサーチャーとよぶことを好む。医学用語など詳しいが、教育は高校 4 年（S4）までで、そこで学んだ生物学とか化学がその基礎になっているという。薬草の知識は祖父母から得た。

A 2・・・プロフェッサー・ムスタファ（40 代の男性）のクリニックはブソガ第一の都市であるジンジャの中心部に大きな看板をかかげて開業している。この町でもっとも繁盛しているハーバリストであろう。中に入ると 6 畳ほどの待合室がある。壁にはげげげげの色の人体解剖図がいくつも張りつけてある。そこから奥の部屋にはいると立派なデスクがあり、その向こう側にムスタファ氏が座っている。両側の壁には天井まで棚になっていて、形のそろったビンに入ったクスリが数百本、整然と並んでいるのが圧巻である。診療室というよりは研究室といった雰囲気だ。

かれの名刺にある正式の名は、（プロフェッサー）ムスタファ・アル・シャリフ・ハッサンといい、ムスリムである。「プロフェッサー」は自称だといった。かれはソガ人ではなく、ここから 50 キロほど東のブギスの出身である。1964 年生まれで、15 歳のときインドにいて民間医術を学んだ。占星術、手相などもこのとき仕入れた知識で、クスリの治療と併用している。他方、かれは祖父、父とつらなる伝統医で、クスリの知識はここから得た。そればかりでなくクスリの原料である薬草、薬木も出身地であるブギスから主に得ている。そこはエルゴン山のふもとであり、材料が豊富であり、また手間のかかるクスリをつくってくれる仲間もそこにいる。かれはクスリの仕入れには熱心で、いまウガンダに進出しはじめた中国産のクスリ（漢方）の使用を検討している。

ムスタファがバサリルワ（A1）とちがうのは、クスリの知識を得るのに一種の靈感にもよることだ。それは「夢」だというのが、昼間でも一瞬うつらうつらしたとき、特定の病に適切なクスリの種類を知るのだという。実はこうした夢によるクスリの知識は精霊を扱う B,C のタイプのハーバリストの専らにするところである。

ムスタファの名刺には次のような文句が英語で印刷してある。「189 種以上の病気を治療する。たとえば、高血圧、糖尿病、喘息、がん、結核、精力減退。そして次のような諸問題を扱う。仕事、愛情、結婚、運勢、昇進」。ここで興味があるのは後半部の「プロブレム」の内容である。後に詳述するように、実はこれも精霊を扱う B, C のタイプのハーバリストの得意とする諸問題である。B, C のタイプの方はこれに呪術的に対応するのだが、ムスタファは占星術、手相などのテクニックを使うのである。このようにかれは、伝統医が兼ねる伝統的な占い師（オムラグジという）としての性格も、形をかえて受け継いでいるといえる。

ところでかれは Uganda National Integrated Forum for Traditional Health Practitioners という組織のコーディネーターの役にある。この組織もまた会員をつのって、証明書やバッジを発行している。その登録簿をみせてくれたが、名前とか住所のほかにはオリジナルの写真が張ってある。こうすることで、会員の意識を向上させ、不祥事をチェックできるといった。

A 3・・・プロフェッサー・サロンゴ（50 代の男性）。かれのクリニックもジンジャの町なかにある。しかし、おなじく「プロフェッサー」を自称していても、ムスタファ（A2）とくらべるとずっと貧弱な構えだ。クリニックというよりは薬棚のあるただの店のように見える。かれもソガ人ではなく、となりのブニョレの出身である。そこで機械工の仕事をしていた 1990 年に、エイズにかかり衰弱した。そのときかかったハーバリストが良いクスリをもっていて、そのおかげで回復した（かれはこの間の回復過程を写真のアルバムにして、客に見せている）。そして、このハーバリストからクスリの知識を得て、カンパラで治療所をひらいた。

このエイズ用のクスリは 20 種ほどの薬草が混ぜられていて、エイズ・HIV ほか、関節痛、腫瘍、梅毒、精力増強などに効く。咳には効かない。プラスチックの缶にはいった粉薬である。ひとつ 3 万シリングで、一ヵ月分。お湯に溶いて 1 日 2 回服用する。このクスリのエイズにたいする効力について保健省（その Research Laboratory of Natural Chemotherapeutics）からの証明書（2003 年）が張り出してある。同様の証明書はジンジャの聖フランシス病院からも貰っている。

三つ目の証明書は南部アフリカのスワジランドの Traditional Healers' Association のメンバーであるというもの。これには次のような事情がある。カンパラのクリニックにいたとき、ひとりのスワジランド人のエイズ患者を治療した。かれは帰国したとき完治した。このことを知ったスワジランドのハーバリストたちが、サロンゴ氏にクスリをもって来るように招待したのである。かれは 150 キロのクスリをもってスワジランドを訪問した。その後もスワジランドからクスリの注文がある。

このようにかれはエイズ治療専門のハーバリストとして活躍している。バサリルワ（A1）



と同様、みずからを伝統医、オムイワとしてではなく、リサーチャーというように考えている。店先にかかげた3メートルほどの横断幕に、プロフェッサー・サロンゴという名とともに、Uganda Badiira Herbal Medical Research Centre (UBHMRC) というかれの組織の名称が掲げられていることでもそれは分かる（これは15の支部をもつ）。保健省の証明書とともに、こうした位置づけは国によるエイズ対策に沿ったものである。国からはエイズ・HIVの予防や治療の医療品はこないが、かれの組織にたいしていくらか補助金が支給されている。

A4・・・ディオゴ（男性）。かれはまだ25歳の青年である。イガンガ・タウンの商店棟の一面に開設したクリニックにつとめている。Abesiga Herbal Research Clinic というのがその名称である。外観は表に大きなテーブルのある事務室兼受け付けがあり、その奥に診療室があるという医院風である。実際、隣には医師が経営者である本式のクリニックが並んでいる。しかし、本式のクリニックほうが小さな薬局を兼ねているのにたいし、ディオゴのクリニックがハーバリストであることは、棚に医薬品外の栄養食とかペットボトルにつめた飲み薬（ハーブ）しかないことですぐ分かる。もうひとつの部屋には、取ってきたばかりの薬草が積んであった。

ただディオゴのクリニックはクスリよりも、足の裏や手先をマッサージしたり、そこを指で押すことで体の悪い箇所を診断する、レフレクソロジー（反射医療法）という診療をうりものにしている。かれは高校を出たあと、カンパラの教習所で、このレフレクソロジーの技術を学んだ。そのときの教師はインドからやってきたひとで、インドでつくられた教科書もここに置いてある。それを見ると、両足で500箇所、両手で78箇所の検査点がある。ディオゴによると、レフレクソロジーはウガンダではまだ馴染みがうすく、ひとびとの反応はいま一つという。

このクリニックはかれより年長の二人の男性と共同で経営している。この三人はレフレクソロジーの教習のあと、ブガンダにある別の支所に勤めていたが、2002年にここイガンガに新設したクリニックに来たのである。三人はたまたまセブンスデイ・アドベンティスト教会の信者だという。

A5・・・クリスティン（50代の女性）。彼女はジンジャの町なかの住宅地に住む主婦である。彼女の長女はウガンダの大学、マケレレを出て文部省に勤めている、長男は大学を出たばかり、次女は大学ゆきのスポンサーを探している。彼女は建物と道路のあいだの庭地に、出身地である祖父の家から幾種類かの薬草をもってきて、自家用に植えていた。そのうち、それを見た通行人が薬草が欲しいとやってきた。あるいはその薬草からつくったクスリが欲しいとやってきた。場合によると、通行人が薬草の使用法を教えてくれた。こ

うして彼女は口伝で自宅にやってくる患者にクスリを処方するようになり、しだいにオムイワ、つまりハーバリストになっていった。ただ、A1 から A4 の例がプロのハーバリストであるのにたいし、クリスティンの場合は大変しろうと的である。実際、彼女はみずから「オムイワ」と呼ばれるのに抵抗があるという。ハーバリストであることを公に認めると、各種の組織から勧誘がはじまり、会費をせびられ、勢力争いに巻き込まれるからだ。しかし、彼女が精霊の仕事には全く関与しないという点で、オムイワそのものである。

彼女のクスリ観は機能中心で、霊的含意がないから、彼女を私のいう「クリニック」タイプのハーバリストの部類に入れてもかまわないだろう。彼女はアマチュア的だとはいえ、自分のクスリには自信をもっている。マラリアのクスリには 3 種の薬草を混ぜるが、それを煮てのむと、1 年間はかからないという。また 20 種類以上のクスリで、心臓病、不妊、胃痛、腫瘍、喘息、月経不全、そしてとくに高血圧を治療するという。さらに聞いてみると、子どもの勉強を増進するクスリもある。それを煮て蒸気をだし、上から毛布をかぶって吸う。これを 4 日つづけるのだという。これなどはわれわれから見ると多分にまじないめであるが、ソガ人にとっては精霊が関与しないハーバリスト的治療の常識的な範囲である。

#### 事例 B アバスエジ・タイプ

B1・・・ジェームズ・マガンダ（60 代の男性）は本論文の冒頭に紹介したハーバリスト集会の一方の代表者である。ナムンガルウェ・マーケット（イガンガ・ディストリクト）付近のもっとも活発な伝統的宗教集団、アバスエジの一員であり、ハーバリストである。簡単な経歴は次のようになる。1941 年生まれ。中学は途中で退学。しばらく叔父のところなどで働く。1966 年最初の結婚。1976 年、自転車で牛乳を配達中、転倒した。そのときのショック（猛烈なつむじ風を感じた）で失神した。四日間目が覚めなかった。ワルンベという精霊が憑いたことがわかる。1977 年、イニシエーションを経てアバスエジになる。1987 年、政府の伝統医療対策の一環で、保健省とのコンタクトができる。その後種々の役人、医者、外国 NGO などとの連携がうまれた。アバスエジの間で信頼を得ようになり、ハーバリスト組織のリーダーにもなった。

最近の大きなニュースは、集会場と薬草からなるハーバリスト用のコミュニティ・センター（Kawete Community Centre for Traditional Medicine）が建設されたことである。マガンダたちの活動が、東アフリカのハーバリストのネットワークが開いた 2000 年の大会にカナダからやってきた代表の目にとまり、建設資材の援助がおこなわれた。敷地はマガンダのもっていた土地を提供し、建物自体はマガンダがチェアマンである組合、Uganda

Herbalists and Cultural Association に登記されている。ここでは地域のハーバリストたちの会議や、保健省などから派遣される講師の講演会や講習、外国からのリサーチャーの歓迎などが行われる。その際、アバスエジたちが得意とする音楽が演奏されることがある。

このセンターではときに治療もおこなわれる。そのためのクスリもここにストックされている。特徴的なのはここでの治療は、バサリルワ（A1、かれもこの組合の会員である）のような「クリニック」タイプの治療のみがおこなわれることだ。マガンダのようなアバスエジが治療をするときでも、ここでは精霊には関与しない。マガンダはこのことを、「伝統的病気」（obuwaire obwobuwangwa）は鶏や山羊を犠牲にしなければ治らない、と表現した。つまりマガンダのなかでは、クスリだけで治る病と、精霊の儀礼をしなければ治らない病とが区別されていて、前者はクリニックあるいはこのセンターのようなところで処置できるが、後者は精霊の社祀のある自宅でなければ治療できないというのだ。

私がここで「伝統的」と訳した（接頭辞を取った）obuwangwa という語は、通常「文化」、すなわち英語の culture の訳語として用いられる語である。ここにアバスエジのとしての自意識の一端が見いだされる。病院と西洋医学では治療できない病気があり、それは昔からソガ人に伝えられた精霊儀礼とクスリによって治される。それを伝えているのがアバスエジ集団である。アバスエジがもっている信条や儀礼は、植民地時代以降入ってきた西欧的思想やキリスト教とは異なる、ソガ人の伝統であり「文化」である。まずこういったところがアバスエジがもっている基本的な意識であろう。マガンダがチェアマンである組合の名称が、ハーバリストの組合であると同時に Cultural Association でもあるというのはそのことを指している。

ではマガンダの自宅のほうはどうなっているか。かれの家族は3人の奥さんと20人ほどの子ども、さらに兄弟夫婦などとひとつの屋敷地に住む大家族である。その庭には数個のエイサボ（eisabo）とよばれる大小の社祀が立っている。直径1-2メートルほどの円形の小屋で、それぞれキントゥ、イラザ（これがマガンダのイニシエーションで憑依した霊）、ルバーレなどの精霊（omusambwa）のすみかである。これらはみなしっかりした壁をもった小屋であるが、マガンダが最初に憑依したワルンベのエイサボは、高さ1メートルほどの柱に草の束が屋根状にかぶせてあるだけの粗末なもの。マガンダによれば、ワルンベは周囲を見渡せるように、このようにスカスカのだそうだが、実は伝統的なエイサボは皆このように簡単なものだった。人が住めるような立派なエイサボというのは近年の発展である。また庭のまわりに植わっている樹木はおおかた別の精霊のすみかだという。イセジャ、キワヌカ、ムカマなどおそらく10種以上の精霊がそれぞれ樹木を宿として存在する。これらの精霊はそれを必要とする患者がきたとき、その木の下で呼び出し、憑依させ、供犠して、場合によっては仮の小社祀をたてることで、病気を治す。

これらの社祀に囲まれるようにして直径5メートルはある、やはり円形の家屋がある。

これが訪問してくる患者に対応する診療室である。ほかのアバスエジ・ハーバリストのそれにくらべると、おどろおどろしい飾りとかクスリの山とかがなく、実にさっぱりしている。マガンダのクリニック・タイプ指向が表れているのかもしれない。しかしやはりここは近代的で機能的な診療室ではない。精霊を呼び出すマラカス、寶貝の首飾り、アマエンベという精霊を水牛の角に閉じ込めた呪物などがかごの中にいれられ、上から布のカバーがかけられている（これらの用途については後述）。そしてここを訪れてくる患者も並の病気ではない。私がインタビューしているときにも、まだ若い女性が夫と親につきそわれてやってきたが、胸に痛々しい腫瘍があり、病院では治らないといわれた（その理由は勿論、医術上の問題でもあるし、費用上の問題でもある）。

マガンダはこうして、アバスエジの伝統的宗教を「文化」的活動としてとらえ、ハーバリスト的活動をそれと組みあわせて発展させた典型的なタイプということができる。ここで冒頭のハーバリストの集会に登場した「文化首長」とイジンバ氏との関係も述べておきたい。ブソガにおける文化首長とは 1993 年に復活したブソガ王国を構成する 11 の首長国の世襲的なサザ首長のことである。植民地時代以前の首長は文字通りの支配者として、また植民地時代は行政首長として、政治的な権力をもっていたが、現在の首長は、ブソガ王国とともに、「文化的リーダー」というウガンダ政府が認めた新しい制度のひとつで、政治的権力をもっていない。政党政治や行政組織に参加できない。あるのは、住民一般が漠然ともっている伝統的リーダーシップの記憶に依存して、住民の教育や福祉や家事や健康衛生の意識向上に指導性を発揮するという一種の NGO 的活動だけである。資金、資源、政府からの援助などは殆どない。しかし、イジンバにはかれの首長国であるキグル地域を中心とする広い人的交流と、ブソガ王国との連携というふたつの資産がある。キリスト教とイスラムに包囲されて宗教的少数派になってしまったアバスエジのリーダーでもあるマガンダにとって、イジンバは「伝統」を媒介にして外部につながる大きなドアのような存在である。そこで冒頭のようなシーン、つまりカンパラに本部のある有力なハーバリスト組織の勢力伸長に対抗するとき、イジンバは地域の結束のかなめとして全くふさわしい人物なのである。他方、イジンバにとってもかれの影響力の基盤である「伝統文化」として、アバスエジは数少ない既存の勢力である。ここにハーバリストのマガンダとサザ首長のイジンバの緊密な連携がうまれる背景がある。

B 2・・・ナンバガ（50 代の女性）。彼女の家であり仕事場はイガンガの町なかにある。マガンダ（B1）とはちがい、この家の中庭に入ってきて、ここがアバスエジ／ハーバリストの場所だとはわかりにくい。しかし実際には、長屋式になっている部屋のうち、ひとつは待合室であり、もうひとつは大量のクスリが大型のビンにつめられて整然とならんでいる貯蔵室である。そして 10 畳ほどの大きな部屋が診療室である。ここには種々の霊的な仕

掛けがある。一番変わっているのは、天井にあるエイサボ（社祀）だ。草の束や樹皮布が傘状になったもの（つまり社祀の屋根をあらわす）が四つほど、固めて吊り下げられている。そこには彼女が必要とする精霊すべて（20 ほど）が宿っているという。これは仮のエイサボで、余裕ある場所へ移ったら地上にたてるつもりだというのが、宙ぶりのエイサボというのは初めて見た。壁には宝貝でつくったオルテンベとよばれるアバスエジ特有の首飾りが 30 ほど掛けられている。

ナンバガというのは彼女が憑依した霊の名前である。1986 年に彼女は突然ある霊が憑いて、そのまま行方不明になってしまった。彼女を見つけ出したのは長女で、その場所はビクトリア湖にうかぶ小さな島にあるブオンダという村だった。ここが彼女に憑いた霊、ナンバガの本拠地だった。ここで彼女は 5 箇月過ごし、そのアバスエジと交流し、その仲間になった。これが彼女のハーバリストへの道の始まりでもあった。ナンバガ霊はこの診療室の壁の一部に特別の場所をあたえられている。そこはカーテンがかけられ、この霊が宿っているというひとつの石が収められている。この部屋には治療用にビクトリア湖からもってきた水が 7 缶も置いてある。これもナンバガ霊が湖の霊であることによる。新品の木製の櫥も壁にたてかけてある。彼女の生まれはブソガの北部であるが、ナンバガ霊の里とのつながりの方が強いらしい。毎年 12 月 25 日からこのブオンダで行われる年越しのアバスエジ集会には必ず参加している。この年末のアバスエジの集会というのは、クリスチヤンのクリスマスに相当するもので、ブソガ各地でおこなわれる新機軸の祝祭である。

このカーテンの前で彼女は霊を呼んでみせてくれた。アバスエジの制服である樹皮布を着ける。ひょうたんのマラカスを二、三回振って、両手を上にあげ、ヒュというような声をあげたかと思うと、甲高い裏声のような霊の声に変わった。表情もちょっと緊張したが、態度の変化はない。私の連れのイジンバ氏に盛んに話しかけ、かれもそれに応じる。霊が現れてわれわれに挨拶をしているのだ。両手を差し出して握手をもとめてくる。小さな包みをほどいてコーヒー豆（これは霊的プレゼントの意味がある）をわれわれにくれた。5 分ほどでもとに戻る。マラカスで肩のあたりをなぞて、興奮をさますような仕種をする。私はアバスエジの儀礼で熱狂的に憑依した様子をなんども見ているが、診療室における霊の出現はだいたいこのように、声の変化とメッセージを主として、動きとジェスチャーに乏しいのが特徴的である。これをアバスエジは、「霊は頭のなかにとどまる」と表現する（この点がつぎの C タイプと異なる）。

彼女もハーバリストの組合に入っているし、またいろいろな会議にも参加している。そのうちのひとつ、2002 年 10 月のカンパラのコンフェランス・センターで行われた HIV エイズの対策会議（The Third National AIDS Conference and 1st Partnership Forum）について尋ねてみた。ウガンダ政府は国内のエイズ対策を積極的に公開しておこない、これまで成果をおさめたことで国際的評価が高かった。この会議でも、ムセベニ大統領がでてきて、新

方針を説明した。それは「節制」という精神的方策でこの性感染症を抑え込もうというものだった。確かにこれならば、ハーバリストを宣伝部隊にすることは有用だ。彼女自身が HIV エイズをどう扱うか聞いてみると、基本的にこれを検査したり、治療したりはしないという。それは病院の仕事である。第一、エイズ予防や治療の医療品は政府から支給されていない。彼女ができるのはエイズに付随する諸症状（下痢、嘔吐、発疹、脱毛、腫れ、喉頭炎）にしたがって、精霊から教えられたという彼女独自のクスリをあたえて治すことだ。

彼女はまたアバスエジ／ハーバリストの治療をうけることが、なにか時代遅れのもの、後ろ暗いものと一般に受け取られていることを正したいと考えている。それにはアバスエジ自身が隠れて仕事をするのではなく、もっと公に活動することだ。外国からのツーリストがアバスエジの儀礼や憑依に関心があれば、そうしたコースの企画をしたいという。実際、アフリカの精神的セラピーを見学に来たヨーロッパ人女性 5 人と交流して、ナンバガ氏が憑依状態になっている写真もあった。前述のブオンダで行われる年越しのアバスエジ集会も、彼女は「文化的な活動」として行っているのだ。去年の催しに関してイガンガ・ディストリクトの役所に提出した照会状に、趣旨が英文で簡単に書かれていた。「このセレモニーは文化的社祀（cultural shrines）を刷新することで、われわれのアフリカ文化を強化することを狙って、毎年、年末におこなわれる」。つまりブオンダでのエイサボは、治療目的と同時に、「文化」つまり祭礼のオブジェとして作られていることになる。

B 3・・・ミリアム（40 代の女性）。彼女は有名なアバスエジ／ハーバリストのキナゴイディ氏の妻である。夫婦でハーバリストをやっている。彼らの家はジンジャの町を 1 キロほど出たところにあり、庭の入り口に小さな標識でそこが「ドクター・キナゴイディ、ミセス・キナゴイディ」の診療所であることが示されている。庭に社祀はない。家もごく普通の住宅であり、中に入ると応接室がある。ここがハーバリストの接客室であるのがわかるのは、壁に彼らの組織の証明書くらいだ。ただ四方の壁に、横向きに座っている男の姿を印刷した、たてよこ 20 センチほどの紙が 8 枚ほど張ってある。よくみるとその図は細かなアラビア文字文様で埋められている。この夫婦はムスリムであり（ムスリムとアバスエジは死者の埋葬法が似ているので、両立するという）、どうやらこの図像はマジカルな意味がある。彼女それをクスリ（オブレジ）だといった。

ミリアムがインタビューで話してくれたことによると、女性の患者中心に診るとか、夫と分業して診療しているわけではない。キナゴイディはソガ人であるが、彼女は西ウガンダのパコンジョ出身である。彼女の父親がハーバリストでクスリの知識を教えてくれた。彼女自身、幼いときナビブヤという霊に憑依した。この霊はアバスエジのものではないが、今は自分はアバスエジであるという。彼女がクスリで治す病気は、胃痛、頭痛、梅毒、不

妊、マラリア、精力減退、皮膚病などである。たとえば不妊の女性には薬草を何種類も混ぜて調合したクスリで簡単になおせる。もし子どもができないのが夫の方に原因があれば、かれに別の飲み薬を酒やコーヒーに混ぜてのませる。

彼女のあつかう問題はいわゆる病気だけではない。試験の成績をよくするクスリがある。これを指に切り傷をつけてすりこむ。さらにクスリを歯ブラシにつけて歯をみがくか、口に含む（これは口頭試問向け）。これを試験の前の週の休日あたりにやっておくと、試験日に効いてくる。学生だけでなく、セミナーの試験とか職場の訓練などに合格しようと、大人たちもここにやってくる。彼女はまた職を得るためのクスリももっている。これも同じように指にすりこむ。ウガンダも他のアフリカ地域の例にもれず大変な就職難であるが、ミリアムによればこのクスリで一回失敗しても、二回目にはクスリの種類を変えるので、別の職が得られる。アマエンベという呪物による他人からの攻撃から身をまもるクスリもある。家のまわりのいくつかの要所にクスリを埋めるのだ。

彼女はこのようないろいろなクスリをもっているが、それは全て自らあつめた薬草木で調合したもので、マーケットで買ってきたものではない（ジンジャのシティ・マーケットの一面では生の薬草木が大量に売られている）。彼女は精霊の夢をみて、どの草木からクスリをつくり、どう使用するか教わることもある。あるいは、彼女の組合の同業者からクスリの知識を教わることもある。薬草木をとりに行く場所はブソガの北部、あるいはウガンダ西部（出身地）など。助手をつれてゆく。所有者のある森にはいるときは、ちょっとしたお礼をする。

彼女の入っているハーバリストの組合とは、実は夫のキナゴイディ氏が率いる、新「ウガンダとわれわれの薬」(New Uganda Neddgala Lyayo) という組織である。この組織名に「新」という修飾があるのは、ブガンダ中心だった旧組織を嫌って、キナゴイディたちがブソガ中心の新組織として分離、独立したからである。ただソガ人のハーバリストにこの新組織はあまり人気がない。キナゴイディは地元の FM 放送局でコメンテーターをしたり、自動車をつかったり、たいへん先見性があり野心的なのだが、同調者がいまのところ少ない。

それはともかく、かれの診療室も見せてもらった。前述の応接室の奥にある部屋である。4 畳半といったところで、実に狭い。しかも部屋の半分はクスリの入ったビンとか薬草で埋まっている。ここで患者は霊的エキスパートであるアバスエジと向かい合うのだから、圧迫感がある。これがアバスエジ／ハーバリストの治療の特徴でもある。キナゴイディの場合は、私の見たこともないような占いの道具--- ヒョウタンの口に長さ 20 センチほどの黒い棒をいれ、上下に動かすもの--- と、通例の宝貝を用いて患者の病状を占い、クスリをあたえる。即ち、かれの表面的なモダンさにもかかわらず、診療の形は他のアバスエジと変わらず、霊的占いがその中心にある。

## 事例 C 「ウィッチドクター」タイプ

C 1・・・ウィルバー (40 代の男性)。かれの診療所はジンジャから 2 キロほど北のマーケット・タウンにある。直径 3 メートルほどの丸い小屋で、入り口には Omusawo Wekinansi とした看板がかけてある。これはガンダ語で「クスリの医者」ということで、英語のハーバリストの訳語にあたるといってよいだろう。しかし、ブソガでこの看板が実際に指すものは単なるハーバリストではなく、ここでいう「ウィッチドクター」タイプなのだ。その特徴は彼らのもつアマエンベ (amaghembe) とよぶ野生動物の角でできた呪物と、その霊の独特の働きである。これはマガンダ (B1) がもっていたものと、形も名前も同じであるが、その働き方がちがう。ウィルバーの場合は、男の霊をキザジといい、女の霊はナンバカといい、水牛の角にクスリをいれてそれらの霊を導き入れたあと、その入り口を塗り込めたものである。これらの霊は「夫婦」であり、別々の角に入っていて、診療室の中心に置かれた籠などに大切に保管されている。ふだんは布でカバーがしてあり、カバーをとってこのアマエンベを使ったときは、必ずなにがしかのお金を籠に入れてお礼をする。

アマエンベの霊がアバスエジの普通の霊とちがうのは、霊を呼び込んだ人、つまり霊媒とは独立した動きをすることである。客の前でそれを見せるためには種々の工夫が必要になる。まず室内を完全に暗くするか、カーテンをひいてその背後に霊媒が姿を隠すかする。ウィルバーがわれわれに見せてくれたのは後者の方であった。カーテンの向こうから霊の声が聞こえてくる。最初はしやがれた細い声で、次いで太い声が聞こえてきた。この太い声は私の連れの人たちとあいさつをし、その後いったい何を知りたくて来たのかとあれこれ質問した。この太い声の霊は、キザジでもナンバカでもない別の精霊だった。興味深いのは、カーテンの向こう側の声の出てくる方向である。ウィルバーが座っているのがカーテンの裏の右側だったが、声は左側から聞こえてくるのだ。つまり、この太い声の主 (キブウカという名の精霊だった) はウィルバーとは別の個性性を示唆しているのである。どのような仕掛けだか分からなかったが、伝声管のようなパイプを使えばこうした効果は得られると、私は想像した。とにかく、アマエンベの霊の扱いは普通のアバスエジの霊とはこのように異なり、一層神秘的である。普通のアバスエジの霊は客の眼前でアバスエジに乗り移ったところが見えるが、アマエンベの霊は霊媒の姿はみえず、それに代わって霊そのものが出現するかたち (この場合は声だけ) で展開する。たしかに初めての客はこうした霊の出現に驚くだろう。人々が「ウィッチドクター」を訪れるには、それなりの覚悟が必要な理由のひとつである。

こうしたアマエンベをあつかうハーバリストの小屋も、普通のアバスエジのものに比べて特徴がある。まず光を完全に遮断できるように外との隙間がない。室内を暗闇にするときは、ドアのまわりに毛布をかけて、隙間を埋めるように閉める。狭い部屋のなかは乱雑



ともいえるほど飾り物があふれている。ウィルバーの場合は、精霊の通路だという小屋の中心の柱にツタ状のつるが巻き付けてあり、ナワで編んだ長細いゾウリのようなもの、木製のヘラのようなもの（これは櫓の模型らしい）もぶらさがっている。壁には大蛇の皮とか動物の毛皮、樹皮布、槍などが飾ってある。床にはクスリの入ったビン以外に、呪物（護符）のはいったビンや壺がおいてある。動物の骨もある。ここが霊的な住処であることをことさらに強調しているのである。

このような環境で訪問した患者は、自分の病気の原因を霊の言葉で聞かされるのだが、それは邪術（ウィッチによる術）のせいとされるような深刻なものが多い。ウィルバーがあげた例では、夜中に裸で徘徊する者（これ自身ウィッチとされる）は誰かのアマエンベに術をかけられているのである。このような者は同様にアマエンベをもったハーバリストしか治せない。邪術のせいで不妊になった女性がいる。彼女をもとに戻すには、特定のクスリを体に張り、そこから体内から骨片、肉片、木片などの異物を吸い出すのである。こうして「ウィッチドクター」のところを訪れようとする者の多くが邪術の影響を疑っている。しかし、ここを訪れるのは病人だけではない。人生上のさまざまな悩みを抱えた人々がやってくる。この点では「クリニック」でも、「アバスエジ」でも同様であるが（A2, A5, B3）、「ウィッチドクター」はそのエキスパートと考えられている。商売で成功したい者にはウィルバーは次のような処置をとる。特別のクスリを体にすり込む、と同時に千シリングのお札を燃して灰にし、これもすり込む。代金は高い。まず最初にいくらか払い、その後金をもうけたら、それに応じて払う。学業を向上させたい者には、小屋の外に設置してある専用の石の台の上で、羊肉 1 キロを焼き、精霊とともに食する。

ウィルバーはハーバリストになるにあたっては、先祖からの精霊に憑依した。家族の伝統を受け継いで、かれはアバスエジの一員になった。ただ、かれは子供時代からクリスチャンであったことを、アバスエジになったことで否定していない。近くにボーンアゲインの教会があるが、そこから直接に攻撃されたこともない。たしかに諸キリスト教会は自分たちハーバリストや精霊について、デーモンにかかわっていると非難するが、自分は彼らに悪意はもっていない。憑依後は教会に行っていないが、自分の妻や子供は教会に通っている。家族が献金することで自分は教会をサポートしているつもりだ、とかれは言った。かれはまた、Uganda Neddagala Lyayo というハーバリスト同業組合に所属している（B3 参照）。

C 2・・・キロワ（20 台の男性）。かれは小学校在学中に精霊に憑依した。そうしたら教科書を読むのが嫌になり、学校に行かなくなった。かれと同じように憑依したことで学校をドロップアウトした青年とともに、ハーバリストの訓練をうけた。かれらの診療所はイガンガ・タウンの郊外の住宅地にある。われわれが案内されたのは直径 3 メートルほどの

丸いエイサボであった。中心の柱には草のつる、蛇の皮、オルテンベ（首飾り）などが巻きついている。しかし C1 の小屋とはちがい、壁と床に物はほとんどなかった。ただ柱の根元に布で覆った籠があるだけだ。中を見せてもらおうとアマエンベの角 2 本（太いのは直径 7 センチ、長さ 25 センチほど）、オルテンベ、それにアバロンゴ（双子という意味）という、直径 30 センチほどのドーナツ状の呪物がはいっていた。これらはごく普通のアバスエジ／ハーバリストの持ち物である。実際かれらが本格的なアバスエジであることは、庭にエイサボがたくさんあることで明白である。それも長屋式で間口 50 センチほど、全長 3 メートルほどのレンガ建てに小部屋が 6 つあり、ムソケ、キントゥ、キワヌカ、ワルンベなど 10 ほどの霊が祀ってある。こうした新式のエイサボは活動的なアバスエジ／ハーバリストにも特徴的である。

ところでキロワのアマエンベによるパフォーマンスであるが、キロワともうひとりの青年はカウベル（牛につける 5 センチほどの鈴）を数個結び付けた呪物を持ち、そこにもうひとり年長の男性が太鼓をもって加わり、実際には 3 人で行われた。まず部屋が完全に暗闇にされた。そのためにドアの部分に毛布をまいて慎重に光の漏れを遮った。太鼓がビシ、ビシという感じで不規則的に、威嚇的に叩かれる。アバスエジ風でもない独特のもので、私も初めて聞く打ち方である。二人の鈴が振る音が加わり、部屋中が騒音で充満した。そのうち、次々と声色を変えていくつもの霊がでてくる。私の連れが短い言葉でもっばら挨拶をしている。このとき霊にたいして「ジャジャ」と呼んで返答している。ジャジャとはガンダ語で祖父（または祖母）とか祖先を指すが、転じてこの場合には敬意をもつべきアマエンベの霊を意味する。ふたりの青年がもっているアマエンベの霊の名はイゴンベとその妻であるカレンベである

実際、ジャジャはこうした「ウィッチドクター」が呼び出す霊の一般的な名称としてブソガで通用している。とくにこの語がガンダ語であることは、この種のアマエンベの霊がブガンダからの影響であることを示唆している（ソガ語でこのジャジャに相当するのは「ダダ」である。）。

そのうち、鈴の音が暗闇のなかで移動しはじめた。そして私の前までくると突然、この鈴の呪物が頭のあたり、胸のあたりはかなり強い力でごしごしと押しつけられた。とくに何かを言うわけでもないで、なされるままで 2,3 分がたつ。暗闇、乱暴な圧力、耳を聳る鈴と太鼓の音、というのがこの時うけた私の感覚のすべてである。これでひとつ明らかなことは、アマエンベの霊は霊媒とは独立した行動をとっているという表象である。ここがふつうのアバスエジ／ハーバリストの霊の出現と異なるのだ。こういうアマエンベの霊の出現が普通のソガ人にどれほどの恐れを与えるのか、私には今ひとつつかめていないが、普通のアバスエジの憑依よりもずっと異常さを感じることは確かだ。

C 3・・・サフィアノ（50代の女性）。われわれが彼女の比較的大きなエイサボを訪れたとき、たばこの煙が部屋に充満していた。彼女以外に4人の若い女性が床にへばりつくような恰好でパイプを吸っていたからだ。彼女たちは、2、3度吸うたびにわきに置いた壺につばをはいている。すでに長時間そうしていたようで、目がうつろで陶然とした様子だった。ときどき小声で唱え言をしている。実はこれが現在ブソガに流入してきた新しいパイプ吸引による霊的ヒーリングなのだ。サフィアノによると彼女は現在20本以上のパイプをもっている。それぞれのパイプには異なった精霊がとじこめてある。そのパイプを吸引すると、その精霊特有の能力を発揮して、幸運をもたらす。たとえば、カリサ霊は就職を、ンダウラ霊はトラブル解決を、ナカイマは女霊で幸運を、キワヌカ霊は就職を、といった具合である。これらの霊も「ジャジャ」と敬称される。「ジャジャ・カリサ」というように。この場にいた4人の女性に何を望んでパイプを吸っているのか聞いてみた。一番目は就職したい、二番目は夫がほしい、三番目はその両方、四番目は結婚、と答えた。たしかに彼女たちは、おしゃれの具合などが病人風ではなく、しかもこうした願掛けはこれが初めてではなさそうだった。

サフィアノのもっているパイプはさまざまな形をしているが、町のマーケットから買ってきたローカルなものである。タバコの葉も同様だ。いまこういうパイプをつかうのはアバスエジぐらいのものである。サフィアノはそれに彼女独自のクスリを仕込んで、精霊を憑けたという。パイプを使う霊的ヒーリングないし呪術は隣のブガンダで盛んになり、ブソガのハーバリストの一部がこの流行に追随したものと思われる。実際彼女はガンダ語で書かれた手引きをもっていた。それによると、25の精霊名があげられ、それぞれどのような働きがあるか説明されている。このような手引きの存在は背後に有力な同業組合があることを示唆する。ブガンダでのパイプ集団の隆盛をしめす例としては、シルビア・ナムテビという女性をリーダーとする The National Traditional Healers and Herbalists Association という強力なハーバリストの組合があって、パイプによる祈願術をおこなっている。新聞によると、2006年3月には大統領選挙で勝ったムセベニに、対立候補から当選無効の訴訟が出されたが、これにも打ち勝つために彼女がパイプで祈願したとある<sup>4)</sup>。

特徴的なことに、サフィアノも彼女のエイサボを「病院」(idiwaliro)と呼んでいる。たしかに彼女はパイプ以外にも、普通のハーバリストのもっているような胃痛とか不妊の治療用の薬をもっているし、パイプでも専用のクスリで霊を呼ぶのである。さらにアマエンベももっているし、占い用の小物一式ももっている。これを使って占いの実演をしてみせてくれた。まず霊に憑依する。「ジャジャ・ムワング」だという。毛皮に包んだ小物をひろげると、宝貝、コイン、鈴、玉石、小金属棒、木片などが、全部でおそらく100以上出てくる。こぶし大の巻き貝二個はひろげた毛皮の両側におき、残りの小物を皮の上に数度放ってパターンを見ている。客が悩んでいる病気やトラブルはなにか、どこがどのように悪

いか、原因はなにか、といったように客と対話しながら進む。こうしたやり方はブソガの占い (okulagula) の標準的な方法である。

### 第3節 ブソガにおけるハーバリストの生成

ふつう伝統医とよばれているハーバリストは、実際にはそれを近代医療体系に包摂して代替・補完医療にするというウガンダの政策に対応して、みずから変容したもの、というのが私がここまで書いてきた前提だった。私が便宜的に A,B,C と分けたタイプも、その変容のパリエーションだった。この点をもう少し分析する前に、政府による伝統医の取り込みの方針を概観しておきたい。

最近の新聞の伝えるところによれば、伝統医を国の医療体系に取り込むことは、伝統医療の「制度化」だと保健省は言っている。具体的には、伝統医に公的な資格を認める機構をつくること、近代医と伝統医のあいだで共働する機構を発展させること、倫理コードを練り上げること、伝統医の水準を上げること、土着的知識を保護すること、などである。<sup>5)</sup>

別の新聞記事では政策関係者への一問一答式で書かれていて、今なにが問題か率直なところがでていいる。「今日の社会で伝統医に見込みはあるか」というのがその記事の見出しである。まずウガンダでいま作られている法律（伝統医療法案）は伝統医療と近代医療体系との共働のための準備であると説明されている。そして、伝統医とその薬を管理し規制すること、薬になる動植物の資源を保護すること、知的財産としての薬を保護すること、伝統医のトレーニング・プログラムを実施すること、などをめざしている。

ここで「知的財産としての薬を保護する」というのは、ハーバリストたちが公認される時、自分のもっている薬草木の知識が盗まれるのではないかとという恐れをなくす法的仕組みを考えるということである。「伝統医のトレーニング・プログラムを実施する」というのは、政府が学校をつくるというのではなく、私立のハーバリスト・センターなどが行っているトレーニングが一定の水準が保てるように、大学などと協力して指導するという意味である。「伝統医にどうやって医療倫理をまもらせるか」という問いには次のように答えている。現在多くの自主的なハーバリストの組織が存在するが、これはメンバーの登録以上のことはやっていない。これらの組織が自ら訓練して、自分たちのなかの不良分子を排除しなければならない。政府は法的権限をもった委員会を設立して、医療倫理に反するハーバリスト排除に側面から援助するだけだ、と。

もうひとつの「伝統医術と邪術（ウィッチクラフト）はどこが違い、その境を引くにはどうするか」という問いは、この記事の中心的な話題である。というのは、この記事のリードには「多くの伝統医が邪術に関与していると疑われて、人身供犠、騒動、人の死の罪を負わせられている。そこで政府はかれらの活動を規制し保護することを決めた」とある

からだ。人の死が病気と同様、邪術のせいとされやすいのはアフリカはどこも同じである。それが噂、陰口ならばそれだけですむが、その限度を越えると邪術者あるいは「ウィッチドクター」が襲われるという騒動になる。ここで「人身供犠」(human sacrifice)というのは、「ウィッチドクター」が客に頼まれてつくる呪物のなかに、人の遺体の一部を使用しているという噂が絶えず、そのために子供などが殺されているという話がウガンダの新聞紙面をにぎわしていることを指している。

ところでこの問いに対する政策担当者の答えはこうである。「邪術は大変に有害な仕業で、人にたいして害を及ぼすことを専らにする。他方、伝統的・補完的医療は人に健康をもたらすことをめざしている・・・この法律は、基準の認定、許可、管理、登録などによってだれが伝統医であり、それになるにはどうするかを定める。法的権限をもった委員会をつくれるような法律にして、現在おこなわれていると新聞が伝える人身供犠や人を傷つける邪術を根絶するのが目的だ」<sup>6)</sup>。

以上のようなことから、代替・補完医療化によるハーバリストへの影響にはプラスとマイナスの側面があることがまず推測できる。プラスの側面は政府や公的機関によってハーバリストの仕事が一般的に認知されることである。これはハーバリストたちにとって大きな利点がある。隠れて仕事をする必要がなくなるとか、限られたものとはいえ訓練とか資金的援助が期待できる。医療倫理や脱呪術化の規制がかけられることも、ハーバリストを現代社会に適合させることであるから、かれらにとって必ずしも不利なことではない。道義に反する医療行為や邪術を規制することに反対するハーバリストはいない。

しかしこれらにはマイナス面も伴う。登録やライセンスという制度が導入されると、そのための費用とか、資格の審査など、厄介な問題が生まれる。もし登録しなければ逆に不利な立場にたつことになる。政府の医療体系にとにかくも組み込まれることは、近代医や病院と競合することにならないか、という恐れもある。実際、多くのハーバリストたちは公的機関の薬草の調査研究で自分たちの知識や権利が奪われるのではないかとと思っている。医療倫理の規制も、一定の限度を超すとハーバリストたちにとって窮屈なものになるだろう。脱呪術化の規制が全面的に病の呪術的、霊的な原因を排除する方向へむかえば、ハーバリストの依って立つ基盤が弱くなることであり、またクライアントの期待に答えられなくなるだろう。

こうしてみると、私が「クリニック」タイプとしたのは政府の代替・補完医療化の政策にもっとも適合したハーバリストたちであることがわかる。このタイプには自己のクスリについて分析的に対処し、クスリの公認化に積極的な人もいる。バサルルワ (A1)、プロフェッサー・サロンゴ (A3) のように公的な検査機関でクスリが認知されたことを宣伝するような人もいる。それでも、多くのハーバリストは自分のクスリを検査に出すのに危機を感じている。バサルルワの話では、かれが薬草調査を検査機関に依頼された 1991 年当時、

それに応じたハーバリストはかれの地域では 5 人しかいなかった。他方、クリスティン（A5）のようにかなりプライベートなかたちで診療をしている人もいる。こういうハーバリストが政府の将来の「公認化」にどれほど積極的になるか分からないが、あいかわらずプライベートに活動したとしても、B, C タイプに比べると、クスリ中心の診療は客観的には「代替・補完」化に貢献するだろう。

ハーバリストの同業組合をつくるのにもっとも熱心なのもこのタイプである。プロフェッサー・ムスタファ（A2）が言うように、会員に登録することでハーバリストの意識を向上させ、不祥事をチェックできる。しかしなんといいても、組合が政府、役所との連携と補助の受け皿になることは大きい。政府の政策から見ると、個々のハーバリストと政府の間にたつこのタイプのハーバリスト組合は補完医療の相手として最適であることはあきらかだ。

ブソガでは病人は病院とハーバリストの間を、費用、治療効果、病気の種類、手間・相談時間、便利さなどの理由によって、思うままに行き来する。これは患者の側からの主体的な「代替・補完医療」としてのハーバリストの利用であるが、病院の医者とハーバリストの方でも意図して相互に患者を照会しあっているのはバサルルワ（A1）の例でふれたとおりである。また、かれの場合は病院での診断をそのまま受け取り、診断できていないものは「邪術」とするというかたちで、まさに「補完的」診断術を発揮している。一般に、多くのハーバリストが病院における患者の診断を重視していることは確かである。アバスエジ・タイプのナンバガ（B2）でも病院でのエイズの診断を自分の治療に参照している。また病院では治らないといわれた患者は、ハーバリストにゆくしかない（B1）。このような病院との補完性がすべてのタイプのハーバリストをして、自分の診療所やエイサボを「病院、クリニック」と呼ばしている理由でもあろう。もっとも、アバスエジ・タイプでは、かれらの独自性は占いによって病が霊の障りであることを知り、それに従って治療するところにある。またある「ウィッチドクター」は、占いの結果、霊が関与していないことが分かったら、その患者には病院に行くように言うと言主張した者もいた。これなどは、少なくとも政府の考える伝統医の「代替・補完」性ではない。政府の政策には霊的治癒が除かれている。

クリニック・タイプのハーバリストには、霊に関与しない代わりに外来の「代替医療」を利用する者がいる。レフレクソロジー（A4）、手相・占星術（A2）がその例である。病院との違いはそれだけではない。適正なクスリを夢で知らされたり（A2）、勉強を増進する治療をしたり（A5）、病院では治療しない邪術の害を治したり（A1）と、B, C タイプと共通の技能を所持していることは見逃せない。クリニック・タイプのハーバリストが、クスリがちがうだけで病院・西洋医と同じ世界観だといえない理由である。

この点をアバスエジ・タイプ（B）と比較してみよう。前述のウガンダ政府の伝統医の取

り込みの政策の概要からも分かるように、伝統医のクスリの治療にだけ関心があり、その精霊との関わりには無関心である。より正確には単なる無関心ではなく、邪術の抑圧というところに邪悪な霊的活動（アマエンベなど）の防止が含まれて、アバスエジのもつ精霊にも無言の圧力をかけていると言ったほうがよい。アバスエジの精霊信仰を近代医療体系との共働の対象からはずされるのは当然なのだ。こうしてアバスエジ／ハーバリストは現代医療政策と潜在的に緊張関係にある。もうひとつ重要なこととして、アバスエジは伝統的な精霊信仰として、キリスト教という近代と西欧を代表する宗教と思想に圧倒され、排除されてきた歴史がある。アバスエジとして残っている人々は全く少数の中核部分だけで、その他の全てソガ人は名目的ではあれ、クリスチャンか、そうでなければムスリムであるというのが現状である。

このような状況下でアバスエジが生き残る道はなにか。実はアバスエジのハーバリスト化というのがその道だったと私には思われる。つまり、アバスエジという精霊儀礼の専門集団が、ハーバリストというビジネスにも乗り出したということである。アバスエジは本来宗教集団であって、伝統医（オムイワ）ではない。しかしかれらが関与する精霊は一般の人々に病をもたらすと信じられてきた。つまり人は特定の霊とのなんらかの関わりから（通常、一族がもっていた霊への儀礼的対応を怠ったという理由で）病になる。それを癒すにはかれらが主催する儀礼をやってもらう必要がある。それは、犠牲獣などを用意し、一族の参加を要請し、場合によっては何日もかかるほど大げさなものである。そこで精霊を独特の音楽で呼び出し、だれかに憑依させ、供犠をすることで病人は病から脱けでる。7) この儀礼の過程自体には薬草は無関係である。そのアバスエジもクスリの知識を新たに得るとか、それまでの知識によってクスリを増産し、治療に力をいれることで、自らハーバリストになれる。それだけでなく、ハーバリストとして活動することで、本来の霊的能力もあわせて発揮する機会がふえるのだ。

私のみたアバスエジ／ハーバリストの多くは、活発なハーバリストとしてだけでなく、アバスエジとしての活動もまた刷新していた。ナンバガ（B2）の場合でいえば、彼女の診療室はたいへん機能的にできていた。当面のエイサボ（社祀）が天井につるしたあったり、精霊の宿る石というのが広い部屋の一角に鎮座したり、壁のあちこちにはアバスエジの装飾品がこれ見よがしに飾ってあった。このような診療室のような社祀というのは、全く新しいものである。それどころか、今ではごく普通に見られる人が二人ほど入れる円形の社祀も、あるいは方形の小室が横にならんだ「長屋」状の社祀も、ここ30年ぐらいのイノベーションであることはまちがいない。私が見たもっとも正統的な社祀は、ブスイキラという場所にある「キントウの墓」の一群で、全て高さ70-80センチの木の枝の柱にかぶせた草ぶき屋根だけの単純なものだった。私が1971年当時、ブソガ北部のナムエンドワで見たのも、同様だった。ところが現在、イガンガのまわりで見いだされるアバスエジ／ハーバ

リストの社祀は、人の住む小ぶりの住居と間違ふほど手のかかったものである。

そればかりか、私は何箇所かのアバスエジのところで、壮観ともいえる社祀群に出会って驚いたことがある。ひとつはナビトゥという所のアバスエジ／ハーバリストの家であった。まず庭先に 4 メートルほどの高さの蟻塚の上に大きなエイサボが載っているのが目をひいた。立派なモニュメントになっている。その近くに数個のエイサボがあったが、そのひとつは、上下二段のものがあつた。つまり二階建ての霊の家である。こうした構造が可能なのはレンガとセメントを使っているからだ。これらが前庭だとすると、10 メートルほどすすむと後庭がある。ここにはぐると円を描いてレンガ建ての丸形エイサボが 11 戸ならんでいる。これだけでも壮観であるが、なんとその後ろにまた庭があり、やはり 10 戸ほどのエイサボが円形にならんでいる。そこからさらに奥に進むと、三番目の奥庭の建設中のエイサボ群が数戸みられた。これら全部で 40 戸ほど社祀があり、これを維持するのは大変だということだった。

別の場所の例では、セメントでかためた直径 1.5 メートルほどの円形社祀が 13 戸、庭に一行に整然とならんだ社祀もみた。その列は 20 メートル以上あり、これも壮観だった。一戸につき精霊の夫婦、あるいはその息子にあたる精霊が祀られているという。その列から離れて、一戸建ての大きな社祀があつた。内部に入ると壁一面に絵が描かれていた。供犠用の鶏を持ってやってきた患者に本人が応対している図、キントゥという文化英雄が世の中にもたらしたもの（牛、羊、バナナ、槍など）をひとつずつ描いた図などであった。さらに別のアバスエジの家では長屋式の社祀の屋上に建てられた特別の社祀があつた。下から見上げると鳩小屋のようにみえたが、これは蜂とともに飛ぶキドゥマという強力な霊のエイサボであった。そこまで登っていける外部階段がつけてあり、社祀のなかを見ると、霊のための料理につかった鍋がいくつも納めてあつた。

私がここで言おうとしているのは、アバスエジ全てではないにしても、そのうちの先進的な部分は、近年ハーバリストとして活躍する際に、精霊儀礼の活動を縮小するのではなく、それを刷新するかたちで拡大したということである。それが目に見えるのが上に述べた社祀の進化というわけだ。枝を柱にした草ぶきの小さなエイサボが、人の入れる大きさのレンガづくりになった。さらに、人の目を驚かすような多数の社祀群や、一風変わった社祀をつくったが、それは恐らく訪れてくる病人にハーバリストの霊的権威を印象づけるものだった。一見このことは、代替・補完医療化が進行しているハーバリストにとって逆行的に思える。実際に代替・補完医療化に沿った形の「クリニック」タイプのハーバリストもブソガで生まれているのだから、アバスエジであることを強調するハーバリストはたしかにそれに比べれば逆行的である。

ところが、アバスエジ・タイプのハーバリストも、代替・補完医療化の動向に基本的に同調していることは、かれらが実際にブソガにおいてむしろ「クリニック」タイプよりも



繁栄していることから、認めなければならない。そして似たようなことは、アフリカ各地で起きているのである。南アのズールー人における占い師 (diviner-diagnostician) とハーバリスト (healer) の関係を述べた研究がある。占い師はウィッチラフト騒動を助長するので (つまりいたずらに多くのウィチの告発をするというので)、政府によって 20 世紀のはじめから法的に禁止されてきた。しかしそれはかれらの数を減らすことにならなかった。なぜなら逆に占い師／ハーバリスト (diviner-healer) という新たなタイプの増加を招いたからである。その理由はまず、占い師たちが生存をかけて、ハーバリストとして登録しはじめたのである。そのうち、この占い師／ハーバリストという一人二役は、ハーバリスト単独よりも人気があることが分かってきた。従来の単独ハーバリストの困惑をよそに、この新しいタイプはかれらのクスリの知識を流用して繁盛し、逆にかれらは病院と西洋医との競争にさらされた。この占い師／ハーバリストは、その技量の低下や度重なる不正行為の評判にもかかわらず、とくに 1980 年代後半、アパルヘイト以後に都会へ流入した移住労働者のあいだの不安 (ウィッチラフト、犯罪、暴力) に対応して、その数を増大した<sup>8)</sup>。

この南アの事例における占い師とブソガにおけるアバスエジは、近代医療体制への応対という点でよく似た過程をたどったことがうかがわれる。アバスエジは南アの占い師のように法的禁止は受けなかったが、最初はミッション諸教会に、現在ではボーンアゲイン諸派によって非難され、抑圧されてきた。その結果、宗教的にはアバスエジの精霊儀礼は全般的後退にいたったが、南アの占い師がしたように、ハーバリストとしての営業に活路を見出したのである。そしておそらく、両者の営業の繁盛の社会的背景、つまり病とトラブルの脱農村的、都会的状况の進展というところも同じである。

さらにアバスエジ／ハーバリストには、南アの占い師／ハーバリストにはない、現代社会に対応する別の新奇な方策をもっている。それはかれらの精霊の儀礼を「文化」的活動として世の中に認知させようというものである。これにはウガンダ特有の現代政治の背景がからんでいる。ウガンダでは現大統領であるムセベニによる 1986 年の政権奪取以来、人心掌握の一手段として独立直後から廃止されていた王国を復活させた。ただその王には廃止以前にもっていた政治的権力を与えられず、かれが憲法上得たのは「文化的リーダー」という名称であった。

憲法によると、「伝統的リーダー」あるいは「文化的リーダー」とは、王その他類似のリーダーで、その名称が何であれ、住民の慣習、伝統、しきたり、あるいは合意に合致するものである。またそのリーダーの生まれ、または出自の事実に基づいて、ひとびとから忠誠心を得るものである。この規定の特徴は、文化的リーダーの範囲を旧五王国の王様に限っていないことである。実際、現在のウガンダでは各地で、王以外の伝統的、文化的リーダーが名乗りを上げる状況にある。そのリーダーが慣習にのっとって、また住民の大方の合意があれば (つまり強い反対がなければ)、文化的リーダーを名乗るのは自由である。

といって、すぐに政府からの援助が期待できるわけでもない。ブソガではかつての「王」、キャバジンガが復位し、これには政府から精神的支援と若干の物質的援助がおこなわれている。<sup>9)</sup>

それに伴って、キャバジンガを支える 11 の首長国のリーダー（サザ首長）もまた、王国の評議会などを構成して活躍をしはじめた。サザ首長に率いられる首長国内部の諸リーダーも組織されはじめた。というわけで、ブソガはこのところ一気に大小の文化的リーダーの数がふえたのである。そこでアバスエジであるが、かれらのリーダーは「文化的リーダー」とは名乗っていない。むしろかれらは自らのハーバリスト組合の「チェアマン」と名乗るほうを好む（B1, B3）。しかし、かれらは王国の首長たちと深い関係を保ち、王国の儀式があるときは出かけていって、かれら特有の音楽（エンスエジという）を演奏し、場をもりあげる役を引き受ける。あるいは場合によると冒頭のシーンのように、地域のサザ首長と連携をとって活動する。アバスエジの言い分はかれらの活動は「文化」だというものだ。

そこでかれらの言う「文化」、ガンダ語でいう「オブワングワ」（obuwangwa）であるが、これもウガンダでは現在頻繁に使われるキーワードになっている。もともとガンダ語では「習慣」という意味で「ンピサ」（mpisa）という語を、生活文化の意味にもつかっていたが、後に英語の「カルチャー」の標準的な訳語として、このオブワングワが定着した。ブガンダの王制と文化の関係について研究したカールストロムによると、ンピサの方は広い意味での「習慣」を指し、範囲の大きなカテゴリーであるが、オブワングワ（実際には byobuwangwa というかたちで）とされるものは「英語で言えば、オリジナルな、天然の、本来的な、素材的な」ものといった、非常に限定された意味範囲をもつ。これがブガンダの王制派によると、王制の民族的な起源、文化的根源性といった意味になる<sup>10)</sup>。

まちがいなくアバスエジの用いる「オブワングワ」は、このブガンダ起源の原義をひきついでいる。しかしかれらは王様や宮廷ではない。かれらが関与するのは精霊の信仰であり、そのもたらす病気であり、それを治す儀礼である。そうしたことの「文化」性を主張することはどういう効果があるか。ムセベニ政府が「文化リーダー」を制度化したとき強調した裏の意味は、それが政党政治や政府組織に関わらせないという点だった。カールストロムのいうように、オブワングワの意味範囲が限定されたものだとすると、逆にその含意は立場によって特殊化するに違いない。アバスエジがかれらの信仰と儀礼をオブワングワだというとき、逃れられない運命、個人が選択できない強制力、といった含意があるという印象を私は受けた。

つまりこういうことである。精霊の病気は人にとって降って湧いたような災難である。特別の理由によるのではなく、いわば精霊に魅入られたのだ。理由があるとすると、それが祖先から伝えられた精霊だからだ。この病気は病院では治せない。アバスエジ集団に頼

んで、精霊を呼び、犠牲をささげ、精霊名をもらって、やっとな病がおさまるといのである。精霊が障ってなった病気を *obuwaire obwobuwangwa*, つまり「文化病」とかれらが呼ぶのは、病気の不可避性と文化の土着性を結びつけたからに他ならない。そもそもアバスエジの多くは、自分の意思ではなく、霊の強制（憑依や病気）によってアバスエジになったと思っている（B1,B2,C2）。こうした背景をもってアバスエジ／ハーバリストはかれらの持ち物や社祀、儀礼や音楽をブソガの伝統的文化として、つまり非西欧起源の正統文化として誇示、宣伝する。たとえばナンバガ（B2）は年末のアバスエジのセレモニーを「文化的社祀を刷新することで、アフリカ文化を強化する」機会としてとらえている。マガンダ（B1）はかれがチェアマンである組織を「ウガンダ・ハーバリスト文化協会」と呼んで、ハーバリストと文化の二本立てであることを明示している。

この点について「クリニック」タイプにもどると、もちろんかれらは自分たちの仕事を「文化」だとは思っていない。マガンダの組織に入っているバサリルワ（A1）は、その名称のうち、「文化協会」という部分はマガンダたち（つまりアバスエジ）のもので、自分は「ハーバリスト協会」の部分だと言った。おなじハーバリストのあいだでも「文化」についての認識の違いは歴然としている。

では「ウィッチドクター」タイプはどうか。これはかれらのもっとも有力な武器であるアマエンベの社会的評価にかかわる。この呪物を扱うハーバリストは治病以上に、試験、結婚、ビジネス、昇進、選挙、就職といった都市的、競争的状况で成功を願う者に利用されている。ブソガのように一方の幸運は他方の不運と深く結びつける社会では当然のことながら、これを利用して成功したと思う人々の裏側に、相手がアマエンベを使ったので、自分が失敗したと思う人々が存在する。後者にとってアマエンベは紛れもない邪術である。実際、相手がアマエンベをつかうので、自分もそれに対抗するという状況も生まれる。こうして、このタイプのハーバリスト自身の説明ではホワイト・マジックであるが、世間ではブラック・マジックとみなす傾向がある。「ウィッチドクター」という俗称はこうした含意がある。ハーバリスト自身は「日陰者」と思っていないとしても、クライアントは隠れるようにしてここに通うのである。このような事情から、このタイプのハーバリストが「文化」というような公のプラス・イメージを掲げにくいことは理解できる。

「ウィッチドクター」は単に世間一般から疑惑の目を向けられているだけではない。前述のように政府は、かれらをハーバリストのなかの余計な部分として排除し、まともなハーバリストを「保護」といつている。そしてもっとも激しい攻撃は、現在ウガンダで急速に勢力をのばしている、「ボーンアゲイン」諸派のキリスト教会（バロコレと総称されている）からである。かれらはアバスエジの精霊や、とくにアマエンベにたいして、「デーモン」の仕業などと非難して、場合によっては社祀を破壊するような行動もとる。ただ私が確かめたかぎりでは、ボーンアゲイン派に帰依した青年の家に出かけて行って、そこに

ある社祀を壊す「手伝い」ををするといった程度で、南部アフリカでニュースになるような規模の大きなウィッチハントはブソガでは起きていない。いずれにしても、現在のボーンアゲイン派の隆盛は、就職難、生活難、就学難、結婚難などの心配事に悩む都会の青年層をリクルートすることで成り立っている。実際、日曜日にそうした教会に集まるの20歳代の若者の大集団をカンパラやジンジャで見ると、ケニアの農村部で見た聖霊教会の中年以上の会衆を見慣れた私には衝撃的だった。ボーンアゲイン派教会に惹かれる青年層と、「ウィッチドクター」タイプのハーバリストに惹かれる層に共通性があるのは、サフィアノ(C3)の社祀で見たパイプを吸う若い女性の姿からも想像されるところである。

ボーンアゲイン教会の信仰治癒とハーバリストの関係も重要である。キリスト教会の信仰治癒はウガンダでもキリスト教導入の最初から存在し、新しいことではないが、この20年ほど信仰治癒を信仰の一つの柱とするボーンアゲイン派の伸張は目覚ましい。これらの教会は三位一体の神観念をもって、精霊、祖先霊とか邪術による病や災難の観念と信仰上で対抗しているわけだ。こうした関係はアフリカではどこでも見いだされるが、一例としてアッピア・クビによるガーナのアカン人における「土着的」キリスト教会の信仰治癒の記述をあげてみたい。

「ある種の重要な伝統的医療法の要素がこうした教会に見いだされる。暗示の使用、ヒーラーとその行為への信仰、告白、カタルシス、そしてなによりも、集団的なサポート。・・・不安を抱えたメンバーに対して、会衆のサポートと参加は、治癒の過程できわめて重要である。・・・全体としてこれらの教会は都市化にともなう諸問題に対処するのに殊に適している。危機的状況で人はふつう宗教に頼るといわれているが、あれこれの問題をかかえて、都市状況に適応したり、不運になんとか対応する際に、土着的アフリカ教会がアカン人に魅力的なのはヒーリングと宗教の統合がある点なのだ」<sup>11)</sup>。

ガーナのアカン人における「土着的」キリスト教会と、ブソガにおけるボーンアゲイン教会は、「ヒーリングと宗教の統合」という点でよく似ている。そのヒーリングには「都市化にともなう諸問題」が含まれるところも同じである。私がここで関心があるのは、一般的にいつてハーバリストが一方で病院と競合しているだけでなく、他方でこのようなキリスト教会のヒーリングとも競合しているという事実である。つまり、西欧伝来の医療体系を体現する病院、もともとは西欧伝来のキリスト教に宗教的ヒーリングを加味したキリスト教会（とくにボーンアゲイン派、聖霊派、ペンテコステ派、土着派など）、それに対抗する伝統医・ハーバリスト、という治療と治癒の体系のいわば「三つ巴」をどうとらえるか、ということである。実験と分析の生物医学（病院）、ホーリズム（全人医療）の代替・補完医療、信仰治癒の教会という医療諸システム間の対比はよく言及されるが、それらの対抗関係の実際の分析はあまり例が多くない。

同じガーナの事例であるが、アクラ近郊のとくに精神医療諸システム間の対比をリー

ス・マリングズが詳細におこなっている。この著者の立場は、医療システムの機能が、生理的・精神的不調（disease）を、個人的・社会的意味と経験（つまり「病気」illness）に翻訳する、というだけの「医療人類学」には満足せず、社会の下部構造的諸関係とワールド・システムとの関わりから説明している。それを要約すればまず、伝統医は地域の長老でもあり、これによるヒーリングは、長老、チーフ、祭司などの権力を強める。それはリネージの土地所有に守られ、親族関係の相互主義を操作して極端な個人主義的關係を抑えようとする。したがって、伝統医療のイデオロギーは生成しつつある資本主義的諸関係に対抗的である。つぎに聖霊教会のヒーリングは歴史的に、賃金労働と契約関係という新しい生産関係とともに伸長してきた経緯がある。そのリーダーたちは伝統的権威と関係のない若い人々とか、自営業的な人々によって担われてきた。教会自体が小ビジネスに似た経営様式をもち、また教会メンバーは就職ネットワークなどをつくって、若者の苦境に対応するといった方策を持つ。三つ目の西欧的（精神）病理学の治療の特徴は、資本主義の導入とともに顕著になった個人主義的人間観にもとづき、クライアントはそうした社会関係に位置する上流階層を対象にしている<sup>12)</sup>。

マリングズの分析はキリスト教会のヒーリングについて理解できる所もあるが、「精神治療」に焦点をしばったせいか、西洋医療については、ブソガの状況とは全く異なる。つまり西洋医療は階層の上下にかかわりなく、すべてのソガ人がもっとも利用する医療システムである。たしかに私立の医院は費用がかかるが、国立病院は無料診察である（ただし薬は薬局で買わされることが多い）。そして町には医師が経営している「クリニック」がある。これはその医師が診療していないときが多いが、簡易薬局を兼ねていて、気軽に病人が訪れることができる。実際、医師の経営するクリニックと、ハーバリストの「クリニック」は軒を接するようにして町のなかでは営業しているのである。マリングズの伝統医についても、すでに「伝統」からは抜けだしたブソガのハーバリストのあり方とは必ずしも一致しない。

ブソガにおけるハーバリストの私の位置づけは、最初に出した WHO のアフリカ伝統医療の定義に戻らなければならない。そしてこれが他地域では「代替・補完医療」といわれているものに実体的に相当することを認め、代替や補完という言葉を現代ブソガのハーバリスト諸タイプにあてはめて考えることにする。ウガンダ政府の医療政策は WHO 的な代替・補完医療の指針によってハーバリストを誘導し、またハーバリストもその指針を参照しながら自らの道を切り拓いたことになる。ただ政府の政策とハーバリストの取った方策が一对一で対応しているのではなく、そこには注目すべき齟齬や矛盾がある。そうした齟齬や矛盾をブソガのハーバリストの特徴づけをする手掛かりになる。

まず「補完」という点では A タイプが最も程度が高い。この「クリニック」タイプがハーバリズムをもって政府の政策にもっとも抵抗なく適合しようとしたからである。政府は

近代医療制度の補完をクスリに求めているのであって、それとは異質の「代替医療」を必ずしも求めてはいない。ところが、このタイプが政府の医療政策の補完性に依存度が高いということはまた、病院や、とくに町中にこのところ増えてきている西洋医の私立のクリニックとの競争にさらされることを意味する<sup>13)</sup>。そこでハーバリスト側が、A1の邪術診療、A2の手相・占星術、A4のレフレクソロジー、A5の勉強増進などからわかるように、病院でやらない代替的、ないし「全人的」診療のレパートリーをしっかりと持っているのは、かれらなりの独自性の発揮なのである。その独自性も教会などからの干渉が最少であるものを選ぶことで成立している。

B タイプは私が外側から見てもっともスムーズに「代替・補完」の診療体制を發展させているように見える。つまり、アバスエジ／ハーバリストという二本立てを巧みに結び付ける体制を構築しようとしている。といっても、かれらが自ら「代替・補完医療」という外来の概念を意識的に適用しているというのでもない。ブソガにおける医療体制全般の配置のなかで、試行錯誤の末の結集点が精霊の儀礼とハーバリストの結合だった。この二つを結びつけるのに便利な「文化」というイデオロギーもあった。もっとも、かれらが用いる文化概念も決して一様ではない。ウガンダの現代政治の中から生じた「文化的リーダー」の概念への依存は明らかである。また、不可避の伝統、ソガ人のアイデンティティ、マーケットブルな文化資産、といった典型的な民族文化概念が基礎的にある。しかし政府の「代替・補完」政策という観点から言うと、精霊の儀礼は余分であろう。とくに「病気」でもない対人的・社会的トラブルのための儀礼は政府の関心ある医療システムの外である。もうひとつ考えられることは、かれらの精霊儀礼を文化だと主張することで、アバスエジ／ハーバリストは「ウィッチドクター」の日陰者イメージからできるだけ距離をおこうとしていることだ。なぜなら、世間一般からの疑惑が常に社祀とその霊にたいして向けられているからである。

C タイプはクスリも使うが、呪物、アマエンベの最大限の儀礼的活用によって、多くはないにしても、ソガ人の根強い要求に応えている。この診療もたしかに「全人的」といえるかもしれないが、他方そうした「ウィッチドクター」への疑惑から逃れられない状況にある。「代替」医療ではあっても、一種のオカルト的不純イメージがあり、病院の「補完」にはなりえないのである。教会からの圧力がもっとも強く、排斥されているのもこのタイプに対してである。しかし、ウィルバー（C1）の例のように、一般にアバスエジはキリスト教にたいして敵対的態度をもっていない。アバスエジたちは自分たちの精霊信仰を「宗教」に仕立てて、キリスト教に対置してはいない。またこのタイプと「文化」の関係であるが、霊を「ジャジャ」とよぶことや（C2）、パイプ（C3）や、アマエンベの使用法からみて、ブガンダからの影響が大きいことは明白である。土着性の低いこのタイプのハーバリストから、「文化」の主張がないというのも理解できるところである。

## まとめ

ハーバリストの私の三タイプ（クリニック・タイプ、アバスエジ・タイプ、ウィッチドクター・タイプ）は政府による代替・補完医療システムへの適応の仕方の差として、まずとらえられる。図式的に言えば、A はもっぱら補完的に適応し、B は代替・補完の医療システムとして部分的に適応し、C は補完性の意図のない適応になる。一般的に、ブソガにおけるハーバリストの形成は、マリングズのというような階層や下部構造の問題からよりも、直接的に医療の政治の結果から考えたほうが理解しやすい。ウガンダ政府の医療政策はWHO 的な指針によってハーバリストを誘導し、その医療体制に包摂しようとした。ハーバリストはその指針を参照しながら、それぞれの道を切り拓き、そこにいくつかのバラエティが生まれたのである。

それでも三タイプは十分にひとつの「ハーバリスト」の範疇にはいる。実際各種のハーバリスト組合にこの三タイプは混在している。これはブソガにある、病院・薬局の薬とハーバリストの薬草・薬木のクスリという基本的な対比に由来する。

政府とハーバリストは、また異なった医療論理にのっとっている。政府の医療政策の背景にあるのは、いわば「病気の限定と世俗化」である。病気をふくむ心身のトラブル全体から、まず病気とその他の心身トラブル（つまり対人トラブル、邪術）を切り離し、ついで、病の霊的側面を病気の概念から排除し、薬と技術で治療する領域（病院）に専門化することだった。

他方、病気をふくむ心身のトラブルの霊的側面の手当てを専門とする機構として、キリスト教会はブソガに進出してきた。信仰治療をこととするボーンアゲイン派はこの点で顕著である。

タイプの差はあれ、ブソガのハーバリストは一般に、この心身不調への対応における病院と教会の分割に表れた「近代」に対立している、とみなすことができる。またソガ人は、病院と教会の提供する「近代」的なものへの不満足であれ、病院の高額医療費への不満であれ、試験、結婚、ビジネス、昇進、選挙、就職といった都市生活の具体的な不安であれ、アフリカの伝統への回帰であれ、この病院と教会の分割に起因した問題を感じたとき、アバスエジ／ハーバリストにやってくる。いうまでもなく、ハーバリストの供給するものはソガ人の需要に見合っている。

アバスエジ／ハーバリストによる意図的なこの対抗は、単なる保守や現状維持でおこなわれているのではない。政府による伝統医の囲い込みの政策へ対応しながら、自ら刷新することでおこなわれている。端的にはアバスエジ／ハーバリストたちが、自分たちの仕事を「文化」と称しているのがそれに表れている。ウガンダの現代政治の中から生じた「文

化的リーダー」の概念にも依存しているが、他方ではキリスト教文化ではない、アフリカ文化あるいはエスノナショナリズムへの依拠も明白である。

この観点からみるとアバスエジ／ハーバリストは西洋医や病院の単純な「代替・補完」医療ではない。なぜならかれらの活動の狙いは、近代医療システムによって限定された病気の範囲をもともと越えたものであり、病院の領域と教会の領域の統合だからだ。政府の近代的医療政策と、ハーバリストの前近代的であり、同時にまた殆ど超近代的でもあるディスコースとの齟齬はここにある。

現在のウガンダにおける巨大な西洋医・病院医療体制と強力な教会勢力の狭間で、ハーバリストの活動領域は表面的にはサブカルチャー程度に見えるが、かれらが代表している観念、たとえば邪術の被害などは、一般人に潜在して広く受けもたれているのが現実である。冒頭のシーンの、マガンダたちのブソガのハーバリストと、カンパラからやってきたハーバリスト組合の3人組とのちょっとした葛藤は、そうした潜在していたものが顔を出した機会だった。カンパラの3人組が代表しているのは、WHOの代替医療観やウガンダ政府の補完医療策である。かれらはそうした「お墨付き」をもって中央からナムンガルウェという地方の市場へのりこんできた。地方のハーバリストを影響下におき、できたら会員証の売り上げも期待した。マガンダ氏らはこれをガンダ人組織によるソガ人の吸収ととらえ、アバスエジ／ハーバリストの活動を「文化」だと主張して（イジンバ氏は「宗教」だとも言ったが）、ソガ人意識に訴えた。こうして「代替・補完」医療観と「文化的統合」医療観とは、このような形で衝突というよりは、齟齬したのだった。

## 注

- 1) 伝統医の組織化と会員証の発行はアフリカ各地で一種の流行になっている。近藤英俊はナイジェリアのカドゥナで、私がここではあまり追求していない、会員認定証の発行やリーダーシップについての組織間の争いを詳細に議論している。近藤英俊, 2002, 「カモフラージュとしての専門性 ---ナイジェリアのカドゥナにおける伝統医療の専門職化をめぐる---」、『民族学研究』67/3 pp.269-288
- 2) Ursula Sharma, 1993, 'Contextualizing alternative medicine: The exotic, the marginal and the perfectly mundane' *Anthropology Today* 9 (4), p.15
- 3) World Health Organization, 2002, 'Traditional Medicine Strategy 2002-2005' Geneva
- 4) *Daily Monitor*, 2006/3/17
- 5) *Sunday Monitor*, 2006/3/19
- 6) *Daily Monitor*, 2005/9/16 'Do traditional healers stand a chance in today's society?'
- 7) 中林伸浩, 1977, 「憑霊の政治学・・ブソガのアバスエジ」、『民族学研究』vol.42 pp.116-141
- 8) Frank Jolles and Stephen Jolles, 2000, 'Zulu ritual immunization in perspective' *Africa* 70 (2), pp.241-3
- 9) 中林伸浩, 2006, 「ブソガ『王国』の復活とサブナショナリズム (2)」金沢大学文学部論集 行動科学・哲学篇 26 号, pp.51-71。
- 10) Mikael Karlstrom, 2004, 'Modernity and its aspirants ---Moral community and developmental Eutopianism in Buganda', *Current Anthropology*, 45 (5), pp.605-6



- 11) Appiah-Kubi, 1981, *Man Cures, God Heals —Religion and Medical Practice among the Akans of Ghana*, Allanheld Osmun Publishers, p.91-2
- 12) Lieth Mullings, 1984, *Therapy, Ideology and Social Change —Mental Healing in Urban Ghana*, University of California Press, chap.6
- 13) 首都カンパラ郊外の住宅密集地の保健衛生の現地調査がある。それには、私立の薬局・クリニックとハーバリスト（占い師、精霊ヒーラーを含む）が入り交じって、競合している様子が詳しく描かれている。c.f. S.Wallman, 1996, *Kampala Women Getting By —Well Being in the Time of AIDS*, James Currey, chap.6